



~ 5
6713



911.82
Ma858

5
6713

笈之小文序

風羅坊芭蕉菴柳青之同ト
今此乃遠人なり其門葉日々
茂り月々々盛なり門葉推々
翁々年々々皆芭蕉翁ありと
知れり是は戸深川の庵室子園
始り也此乃つる芭蕉と植
多りし故也一此翁上より



教育學部研究
功成賞購入圖書
110
98

学部図書に移管48年6月8日

早稻田大学
教育学部図書

60428

砂石子序

<2016-183>

口^々れ時乃す^々れ^々記と集^々ん
えと^々なる^々て^々笑の^々い^々ら^々
積^々入^々漸^々浩^々翰^々と^々なる^々を^々夜^々を^々
既^々て^々也^々戯^々て^々の^々奇^々仙^々の^々多^々と^々ま^々月
ま^々の^々し^々て^々の^々四^々十^々四^々百^々韻^々の^々色^々を^々傳^々
爾^々來^々の^々葉^々あ^々し^々と^々り^々も^々唯^々し^々州
の^々も^々投^々え^々ど^々む^々し^々初^々を^々群^々等^々
と^々昔^々の^々世^々の^々い^々ふ^々と^々な^々る^々も^々今^々般

梓^々の^々ら^々り^々と^々り^々と^々世^々傳^々と^々唐^々あ^々せん
と^々欲^々し^々て^々物^々守^々め^々し^々と^々も^々傳^々の^々病^々を^々
遇^々て^々息^々也^々暫^々念^々日^々と^々後^々の^々い^々ふ^々

江州大津松本之隱士觀桂堂

破石子

宝永四丁亥年春乙州之因

懇求不得止深筆畢



笑之小文

風羅坊芭蕉

百骸九竅の中を動かさるるより名付らん
死坊やいふ穢まうすもれか坊に破れ
やすしんじりさうちあやうれね
白と好く久し敷く生滯れとら
しんぢすある時を俵へ放柳見
るをあひある時をすすて人々

Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including the characters '笑之小文' and '風羅坊芭蕉'.

あつひのいかに本らふは物の中は
うそは是のふまふ安らげはは
あつひのいかに本らふは物の中は
うそは是のふまふ安らげはは
あつひのいかに本らふは物の中は
うそは是のふまふ安らげはは
あつひのいかに本らふは物の中は
うそは是のふまふ安らげはは

其書乃すは物さしあり志は月雅
のあつひのいかに本らふは物の中は
うそは是のふまふ安らげはは
あつひのいかに本らふは物の中は
うそは是のふまふ安らげはは
あつひのいかに本らふは物の中は
うそは是のふまふ安らげはは
あつひのいかに本らふは物の中は
うそは是のふまふ安らげはは

林三月に物なきにうかひのうらみ
ありては御書に書きたるに
諸人とあひあはれん御書
又山崎の書と名くうらみ
山城乃任老老とせしむるの御書
付て其角書うらみとて送るを
りてなす
附てきたるの御書と書きたる

け句を御書に書きたるに
付りてはとてうらみの御書とて
友親疎門人未あるの御書とて
とて付ひ或は御書の御書を包み
志とて入すは三月乃糧と集り
かといふ紙布綿糸など
帽の志とてうらみの御書とて
ついでに御書とてうらみの御書

くはしある小船とて別墅を
海へけし多庵子酒肴拵り
て那儀と説く名あはれみち
さうくえ好ある人の首途す
まもぬらやのちあうくさ
飛れりれ

柗道の日記屯り色の光紀氏
長明阿佛の尼志文とゆひ情

と重しそら餘を皆貸知ま
ひあ其糟粕と改修りあひす
海へて浅智短尺れ筆の及く
もあすすそ日る海際さうり
晴るそま相さかこよ何ん川
流れりなとらあはれもら
へくえゆれともさあそ換新れ
こらひあすそふたのれ

はれまゝにあらはれぬ糸の残り
山鼓の音のこゝろは糸の目
たましの程もあらはれぬの残り
こゝろの音のこゝろは糸の目
やせんやの書集のつらき
者れ憶ひぬはくわりの人の
護言すこゝろは糸の目
又亡鐘のこゝろ

こゝろは糸の目

甲斐乃園のこゝろは糸の目

糸の目雅なこゝろは糸の目
糸の目雅なこゝろは糸の目
糸の目雅なこゝろは糸の目
糸の目雅なこゝろは糸の目
糸の目雅なこゝろは糸の目
糸の目雅なこゝろは糸の目
糸の目雅なこゝろは糸の目
糸の目雅なこゝろは糸の目

糸の目雅なこゝろは糸の目

三川の國保をあらわすに
 きのくにしをあらわすに
 まの海人は清き海に
 松とよみ二十五里をあらわすに
 吉田よみ

まの海人は清き海に

あまは徳よ田の中よ細くあり
 と海をあらわすに

まの海人は清き海に

保良村より保良古蹟をあらわすに
 まの海人は清き海に
 保良村より保良古蹟をあらわすに
 まの海人は清き海に
 保良村より保良古蹟をあらわすに
 まの海人は清き海に
 保良村より保良古蹟をあらわすに
 まの海人は清き海に

五
六
七
八
九
十
十一
十二
十三
十四
十五
十六
十七
十八
十九
二十
二十一
二十二
二十三
二十四
二十五
二十六
二十七
二十八
二十九
三十
三十一
三十二
三十三
三十四
三十五
三十六
三十七
三十八
三十九
四十
四十一
四十二
四十三
四十四
四十五
四十六
四十七
四十八
四十九
五十
五十一
五十二
五十三
五十四
五十五
五十六
五十七
五十八
五十九
六十
六十一
六十二
六十三
六十四
六十五
六十六
六十七
六十八
六十九
七十
七十一
七十二
七十三
七十四
七十五
七十六
七十七
七十八
七十九
八十
八十一
八十二
八十三
八十四
八十五
八十六
八十七
八十八
八十九
九十
九十一
九十二
九十三
九十四
九十五
九十六
九十七
九十八
九十九
一百

酒も十の倍の量を、お供の御膳に
お入らす

薩摩へお供の御膳

本郷の御膳に、お供の御膳に、
日頃の御膳に、お供の御膳に、
よからぬ御膳に、お供の御膳に、

お供の御膳

お供の御膳に、お供の御膳に、
お供の御膳に、お供の御膳に、
お供の御膳に、お供の御膳に、

白里や崎の御膳に、お供の御膳に、

酒のお供の御膳に、お供の御膳に、
お供の御膳に、お供の御膳に、
お供の御膳に、お供の御膳に、

初春

まきさきまきまきの野うら
枯きややくけうみの二三

伊賀乃國乃波の庄より雪後
系上人の白紙の儀津山新大徳
とやまうらうらき千歳れ飛んを
かりくぬ藍ハ破れて礎とま
坊合まき終て田畑とらみの初あり

まよ乃も像の若れ縁壇を清く
のし親帝とまよれぬ也終を石人
の由教いすまの合おらうあ
甚代乃も終らうまをかく個い海
射くるれま身柳子乃たがとま
菴藤の上は堆つ双林の枯るぬ
花もまのあつまよとそんらぬれ

まよまかむらう信しつあよ

こゝののちのちのちのち

伊勢山回

何乃本れせよふらふら

裸よたましむらむら

美提山

しつ乃かほしと告と野光

龍尚舎

物の名とせんとせんと

現代民歌を考ふる

梅のちやうやうな梅の

ちやうやう

の梅のちやうやうな梅の

神垣のちやうやうな梅の

ちやうやうな梅のちやうやうな梅の

ちやうやうな梅のちやうやうな梅の

ちやうやうな梅のちやうやうな梅の

よーしーしーしー

法華の心持しるは法華の心持

法華の心持しるは法華の心持

法華の心持しるは法華の心持

法華の心持しるは法華の心持

法華の心持しるは法華の心持

法華の心持しるは法華の心持

法華の心持しるは法華の心持

法華の心持しるは法華の心持
法華の心持しるは法華の心持
法華の心持しるは法華の心持
法華の心持しるは法華の心持
法華の心持しるは法華の心持

乾坤無任同行二人

よーしーしーしー

よーしーしーしー

文

藤の具多さハ乃さくらりたりのと
皆松捨たれも水の静よとあみこき
つ合好や乃おん草かて茶よは
なんよあま包て梅み寄る角と
よいすかみこくかなよあはれ
よいすかみこくたれさよあは
おしこくよいすかみこく
あはれさくらりたりのと

初歌

去のあやうき人ハあはれ
足跡く惜みよとりの雨 万葉
首飾山
ぞみきしあまゆり林の歌
三編 多武峯
臍崎 多武峯ヨリ
龍門越たこ
雲雀さくらりたりのと

龍門

新田のやとをたをきん
酒のまをらんかはのち

西河

かろくを山吹らるる

蜻蛉

布敷の流は布敷のまをり二十
山の奥

はな田の川よま

大和

布敷の流 舞西の龍

後尾古へおらたま

様

様うらまをくまのま

日とをまをくまのま

扇と酒をひまをらる

若清水

春ぬのこまをくまのま

乃人をもき土のつれぬもさうあひ
もよあむらうれちよあめん中し
あひあるのちらにむと指ひ流すよ
金とゆららん地してあよの事書か
人よもあらんもかりそえは
のひとけあるし

夜更

しぬひと後よ真ね夜こく

昔お出へ有る書しに云く 万箇

權佛の目もたをあらはめいふか
諸のよま藤のよと書すよこくし
おのくちうしうん

權仏の目よ中しあのよ藤のよ

招提寺鑑真和尚末朝の時
中七十餘年れ難と志のよ
此月乃らら場風吹入るあはれは月

育女のつらきつらき縁をねく

手紙にふりかへしおぼえたるを

四女なるよき世をくつらぬ

廉の角は人一帯のこころを

大母とてあら人のこころを

杜の筑もよき世のこころを

源女

月をあらねば世はくつらぬ

月をあらねば世はくつらぬ

卯月中はのちも縁をあらねくつらぬ

とくにおとす月をあらねくつらぬ

わが世もくつらぬとくつらぬ

はなはたのちも海のこころをあらねくつらぬ

しるしにあらねくつらぬとくつらぬ

源あつらふとて人の世をあらねくつらぬ

茂子とて世のこころをあらねくつらぬ

昔はききしるるに何れもいふ
くさるるにむねをたのむに
羊腸除胆れを根とくひのむね
すしむねにむねをいふむね
はく根はくむねをいふむね
一はくむねにむねをいふむね
くさるるにむねをいふむね
はくむねをいふむねをいふむね

はくむねをいふむねをいふむね
はくむねをいふむねをいふむね

明石夜泊

蜻蛉をいふむねをいふむね
かむねのむねをいふむねをいふむね
かむねをいふむねをいふむね
かむねをいふむねをいふむね
かむねをいふむねをいふむね

そふら道の拙きよきうらぬ知ら
 津島島よふくさうくんとくす海
 の海太たはわらる事我東あゆの海
 の海あやあはる人徳の徳
 とあはれ境よまやのくさうら
 又後の方にとと深く、田井れ如
 うふね村雨ぬらうらうら
 はふね島路(あ)のあふあり舞伏

のうと逆流あやうらうら
 出で清然ねらうらくく一谷内表
 やーと先のくもる物甚代れんれ
 くの海のまゝにまゝに
 件よりとひま二位りあまのま
 と抱まらぬ虎乃は昔衣ははよこれ
 船やうらうらうらうらうら
 肉付宿女舞曹子のくく海

中女國交まゝあつての御覽にあら
まふなれんよとて船中へ投入
供所中の御覧にあらけの御覧に
櫛中の御覧にあらけの御覧に
ありては千葉の御覧にあらけ
ゆりまの御覧にあらけの御覧に

翁名古屋に滞留乃時有

更科記行幸西爰に次

はりなれ里あつての御覧に
あらけの御覧にあらけの御覧に
あらけの御覧にあらけの御覧に
あらけの御覧にあらけの御覧に
あらけの御覧にあらけの御覧に
あらけの御覧にあらけの御覧に
あらけの御覧にあらけの御覧に
あらけの御覧にあらけの御覧に
あらけの御覧にあらけの御覧に
あらけの御覧にあらけの御覧に

Handwritten text in a cursive script, likely a letter or document. The text is written in a fluid, connected style across approximately 10 lines.

Handwritten text in a cursive script, likely a letter or document. The text is written in a fluid, connected style across approximately 10 lines.

Small handwritten mark or character.

Small handwritten mark or character.

Small handwritten mark or character.

Small handwritten mark or character.

わが世にあらば
あはれなる世に
あはれなる世に
あはれなる世に
あはれなる世に
あはれなる世に
あはれなる世に
あはれなる世に
あはれなる世に
あはれなる世に

あはれなる世に
あはれなる世に
あはれなる世に
あはれなる世に
あはれなる世に
あはれなる世に
あはれなる世に
あはれなる世に
あはれなる世に
あはれなる世に

あはれなる世に

Handwritten text in a cursive script, likely a letter or document. The text is written vertically on the left page of the open book. It appears to be a formal or semi-formal communication, possibly a letter of introduction or a report. The script is dense and characteristic of the early modern period.

Handwritten text in a cursive script, continuing from the left page. The text is written vertically on the right page of the open book. It appears to be a formal or semi-formal communication, possibly a letter of introduction or a report. The script is dense and characteristic of the early modern period.

あはれこころをさへかきとらふまのこころを
真まのこころを清く正しくしるまのこころを
もよほしむる

あはれこころをさへかきとらふまのこころを
清く正しくしるまのこころを
もよほしむる

姨捨山

何れも姨捨山にありて月のみを

あはれこころをさへかきとらふまのこころを
清く正しくしるまのこころを
もよほしむる

あはれこころ

月新也四門百家のみし

吹きすゝるいあまのあま

此記行終了後し州以得た最之文
之記及之舊大賦集くは清和下
河清の集と加しとるい企ぬ

江南杖之菴し列梓之

室永六年孟春慶直

皇都 諸仙堂 藏板

書肆

浦井徳右衛門
井筒屋庄兵衛
橘屋治兵衛

山口村

田上友右衛門



越後公海河在乃口是

田上氏